

以前「ウィンブルドン現象」もしくは「ウィンブルドン効果」という言葉が世界で流行したことがある。ロンドン郊外の高級住宅都市ウィンブルドンにあるオールイングランド・ローンテニス・アンド・クリケットクラブで、毎年六月下旬から七月初旬にかけて開催されるテニス大会はグラウンドスラムとされる四大国際大会でも一・二〇年以上の歴史をもつ由緒あるオープン競技大会である。

ところが、男子では一九三六年のフレッド・ペリーが優勝して以来、女子では一九七七年のヴァージニア・ウエード以来、開催場所であるイギリスの選手が一度も優勝していない。そこで座敷を用意しても主役になれない状況が冒頭のように命名されたのである。すなわち、オープンな自由競争による市場経済で、強力な外国企業が国内企業を淘汰していく国際社会の様子がテニス大会の実態に投影されたのである。

そこに最近の国際社会を象徴する「ガラパゴス現象」という言葉が登場してきた。ガラパゴスは赤道直下の太平洋上にエクアドルが領有する島々の名前であるが、大陸から隔離された孤立した環境のため外敵が襲来せず、生物が独特の進化をし、ガラパゴスゾウガメやガラパゴスヨウガンサボテンなど固有の生物が多数棲息し、生物学者チャールズ・ダーウィンが生物進化の理論を発見する契機となった場所としても有名である。

現在は周囲の海洋も一体として世界自然遺産に登録され、世界から多数の人々が観光に殺到して環境破壊が問題になっているが、その孤立した環境が、国際社会から隔離され、世界の潮流に対応できない社会を形成している地域や国家を象徴しているとして「ガラパゴス現象」という言葉が使用されはじめたのである。なかなか巧妙な表現であるが、問題は日本がガラパゴス現象の象徴とされていることである。

その一例が情報通信分野の現状である。日本国内だけを見渡していると気付かないが、日本の携帯電話の普及は世界三四位、コンピュータの普及は世界二〇位、インターネットの利用比率でこそ八位であるが、ブロードバンド回線の普及では世界一八位というのが実態である。比較するのも失礼であるが、すべてにおいて韓国以下である。最早、情報後進国家と表現するのが適切なほど出遅れてしまっている。

そのガラパゴス状態を明示するのが携帯電話の方式である。世界の携帯電話の大勢はGSMという通信方式を採用しているが、日本は独自のPDCという方式に固執してきた。技術としては優秀であるが、結果は孤立無縁である。その影響により、世界の携帯電話の売上はフィンランドのノキアが三四%、アメリカのモトローラが一八%、韓国のサムスンが一三%を占有しているのに、日本の企業六社の合計でも九%でしかない。

この現象は技術の分野だけではなく、政治や経済の分野でも同様である。平和憲法を護持するあまり、国際政治の潮流とは様々な齟齬が発生しているし、世界規模の産業の再編にも既存の産業構造を維持しようとして出遅れ、外資による企業の合併吸収の奔流にも抵抗して翻弄されている。それは島国として孤立した安穏な環境に過剰に適合してしまったガラパゴスの生物と瓜二つであり、環境が変化すれば一気に絶滅する。

もちろん日本の技術や文化がすべて否定されるわけではない。日本固有の食材で発達した日本料理は世界で最高に評価され、マンガやアニメやゲームなども世界に浸透しつつある。情報は独自であることに価値があるが、その一方で浸透することによって威力を発揮するという性質をもつ。これまでガラパゴス国家として育成してきた技術や文化を世界に浸透させる戦略が必要である。